讀賣新聞

発行所 読売新聞西部本社
第13542号
〒802-8571
北九州市小倉北区明和町1-11
電話 (093)531-5131(代)
http://www.yomiuri.co.jp/

2002年(平成14年)8月23日 金曜日

新長期ビジョン論議

地域懇談会IN福岡

国土交通省九州地方整備局が今春策定した「九州・新長期ビジョン―都市と自然、アジアが身近な21世紀のフロンティア九州」を紹介する地域懇談会IN福岡(九州地方整備局、読売新聞西部本社主催)が7日、福岡市のホテルで開かれた。ビジョンは向こう10～15年後の九州の将来像を踏まえ、地方整備局所管事業のあり方を示したもので、パネルディスカッションではビジョンの基本施策について6人のパネリストによる活発な意見交換が行われた。

パネリスト

▽九州大学大学院経済学研究院長 九州・新長期ビジョン検討調査委員会長　矢田(やだ) 俊文(としふみ)氏
▽西日本鉄道株式会社専務取締役　長尾(ながお) 亜夫(つぐお)氏
▽福岡大学工学部教授　吉田(よしだ) 信夫(のぶお)氏
▽NPO法人筑後川流域連携倶楽部理事長 久留米大学経済学部教授　駄田井(だたい) 正(ただし)氏
▽株式会社オリジナル・メディア・サービス代表取締役　大谷(おおたに) 鮎子(あゆこ)氏
▽株式会社福岡ドーム副社長 プロ野球球団福岡ダイエーホークス社長　高塚(こうつか) 猛(たけし)氏
◆コーディネーター ▽読売新聞西部本社経済部長・沢田孝雄

九州の将来像デザイン

九州の将来像について活発な意見交換が行われた地域懇談会IN福岡

都市と自然交流図れ

矢田 俊文氏

――検討調査会長の立場から、この新長期ビジョンの説明と、そこに込めた思いを。

矢田 21世紀初頭の社会は少子高齢化が進み、人々は高いQOL(生活の質)を求める一方で国際間競争が進展、地球環境問題は深刻化する。そうした中で10～15年先の九州の社会資本整備はどうあるべきか、その方向性を示したのが新長期ビジョンだ。

他地域に比べ九州は50～60万都市圏が均等に分布し、豊かな自然も多く、アジアにも近い。これらの地域特性・九州らしさを生かすため、基本コンセプトを「都市と自然、アジアが身近な21世紀のフロンティア九州」とした。地域に住む人だれもが、都市の機能・サービスを享受し自然に親しめるような九州でありたい。

九州・新長期ビジョンの基本施策
◎暮らしを守る国土と環境の保全・再生
◎自然と都市サービスを享受できる都市・自然交流圏づくり
◎地域の活力を支えるネットワーク型交流基盤づくり

インフラは機能重視

長尾 亜夫氏

――思い描いている九州の将来像、新長期ビジョンに対する感想、意見を伺いたい。

長尾 拠点となる都市が適度に分散し、人・モノ・資本・情報が福岡を中心に域内を循環する独立した経済圏を形成しているのが九州の強みだ。

21世紀は、高度成長期のようなアレもコレもの社会資本整備ではなく「機能主義の視点」が必要。社会資本が提供する機能を、目的に応じて低い利用コストで徹底活用しながら、ソフトとの組み合わせによってその機能をさらに高めていくといった発想の転換が大切ではないか。新長期ビジョンにはこの機能主義の考え方が織り込まれており、共感できる内容だ。

吉田 信夫氏

吉田 他の地方整備局の新長期ビジョンに比べ「アジア」を織り込んだことで九州らしい地域の個性、イメージを訴える力があり、評価できる。

九州域内の交通についてみると、東海岸の整備の遅れ、有明海や錦江湾など海上交通の接点としてうまく機能していないことが指摘できる。公共事業予算は減る傾向にあり、道路はつくりにくい時代がくる。道路の混雑解消には自動運転システム(AHS)、車線の変更などソフトの面で対応し、ハード面でも小型車専用道路、環状道路の整備といった知恵を出していかねばならないのではないか。

駄田井 暮らしやすさ、生活の豊かさにおいて九州はフロンティア(最前線)にある。それを持続させることが社会投資の大きな目的。いかに低コストでインフラを整備し、素晴らしい生活を実現させていくかが、今後の重要な課題になるのではないか。

経済活動には条件の悪い山間地域だが、お金をあまりかけないで生活できるというメリットがある。条件の悪い地域でお金を稼がせようとした、これまでの公共投資のあり方を改め、21世紀はお金がなくても暮らせる山間地域を意識したインフラ整備が必要だ。

交通網もっと充実を

大谷 福岡市はかつて大渇水を経験し全国一の「節水都市」と言われるほど水を大切にしている。全国都市部ではガソリンより高いミネラルウオーターや浄水器を使った水を飲む人が半数を超え、水道水をそのまま飲む人は45％という。地球上の水は14億㌔立方㍍、うち淡水は3％。飲料水として使えるのは0・8％以下。自然環境問題にもかかわってくることだが、水の大切さ、そのまま飲めるおいしい上水道整備の推進などを新長期ビジョンに織り込めば、より九州らしさをアピールできるのでは。

高塚 地域社会に必要な要素は人、自然、建物、交通・情報ネットワーク、文化、教育、経済の7つ。高速自動車道など交通インフラは整備されてはきたが、まだ十分ではない。九州の観光入り込み数は2億9千万人。新潟を含む東北7県に比べ1億人も少ない。この差は道路、新幹線のネットワークの違いと見る。情報インフラと合わせ、もっと充実させる必要があるのではないか。

国際交流の面では、大学生だけでなく、高校生を留学生として受け入れて、日本の言葉で日本の文化、技術を伝えてはどうか。日本のどの地域でもやっていないことを九州から始めたい。

より豊かな生活求めて

新長期ビジョンを説明する国交省の担当者

海・川・山を観光活用

駄田井 正氏

――アジアからの留学生受け入れについて伺いたい。

矢田 アジアからの留学生はレベルの高い所を志向して増加しているが、アジアの国々が求めているのは中堅の技術者。日本がどう応えるか。施設や指導者の面でゆとりのある工業高専などで中堅技術者を養成することも大きな戦略だ。九州からもかなりの企業がアジア戦略を展開しているが、個々の戦略をもう少し全体的に統合して、目に見えるような九州のアジア戦略のマーケティングが必要だ。教育の面ではできるだけ実行していきたいと考えている。

――交易もより盛んになる。ハード面でやるべきことは。

吉田 九州・山口の対環黄海、東アジア交流は今後さらに深まることになる。AU(アジア連合)をつくって通貨統合など国と国の障壁を取り除くソフトな議論を始めてもいいのではないか。外国に比べ日本は物流コストが高く、コンテナヤードの機能強化や情報通信網を駆使した物流コストの軽減が必要。陸・海・空交通の整備が必要だが、次の長期ビジョン策定時には、九州と韓国をトンネルで結び、列車を走らせるといった構想も論議されるかもしれない。

情報インフラ整備を

高塚 猛氏

――新長期ビジョンの都市とは別に、個別のまちづくりについて提案があれば。

高塚 21世紀は個人がいかに「幸せで楽しいか」ということを尺度にしなければいけない。経済大国ニッポンから生活大国ニッポンに生まれ変わるということだ。個人の多様な価値観を認め、多くの人に集まってもらうことがまちづくりの基本。東京、大阪に比べ福岡は生活の豊かさを享受できる都市だが、今まで情報発信力を持てなかった都市だったのではないか。情報発信コストが安くなり、地域で起きた現象の情報はまたたく間に全国に伝わる。情報インフラの整備が急務だ。

――高速道が整備され高速バスが多くなってきたが、道路を使う側からの注文があれば。

長尾 人・モノ・情報が空間を移動するモビリティーが今後のキーワードだろう。移動の拡大、発展は人の生活、文明・文化を向上させていく。クロスハイウエーができて高速バスの利便性は確かに増している。福岡・天神まで長崎から2時間、大分から1時間半。ところが、高速道を降りて1㌔走るのに1時間かかってしまっては意味がない。高速道路と一般道のアクセスの大切さを痛感している。

大谷 鮎子氏

――都市と自然のネットワークについてはどうか。

駄田井 21世紀は減少する製造業に代わり、脚光を浴びるのが観光だ。九州の海、川、山を連携させながら観光資源として多面的に活用していくことで、自然と都市との交流が生まれてくるのではないかと期待もしている。文化が経済の成長を支え、その中で遊びと学びと仕事が一体化するような世界が21世紀ではないか。そうした観点から海をはじめ自然を真剣に見直すとともに、海、川、山に親しめるようなインフラ投資のあり方を考えるべきだ。

温暖化防ぐ生活必要

大谷 京都議定書の批准が承認され、日本は1990年比6％のCO_2削減を迫られることになった。地球の温暖化に対し暮らしのレベルを落とさずにどう削減していくか、重い課題を突きつけられたわけだ。何億年もかかってできた石油や石炭を人類は1年で100万年分を消費しており、このままだと、43年後には石油は使えなくなる。美しい地球を残すため、真剣に生活そのものを見直す時代を迎えていることを強く訴えたい。

――最後に矢田先生から締めの言葉を。

矢田 海、川、山などビジョンに書かれているよりはるかに豊かな指摘をいただき、課題も見えてきた。空港や高速道路など派手な面だけを追うのではなく、九州に多い山間地域の生活にかかわる道路整備をどう進めていくか。このビジョンを多面的に解釈しながらハイレベルのQOLを実現させる社会資本整備をしていくことが大切だ。

記念講演

「森・川・緑」で都市と交流

大分県中津江村村長 坂本(さかもと) 休(やすむ)氏

私の村は大分県西端にあって、筑後川の源流地とも言える人口約1300人の小さな村です。最寄りの空港は、熊本空港で55㌔、福岡・佐賀空港で86㌔、大分空港で100㌔以内。東西南北100㌔以内に4つの空港があることは誇りであります。自然環境に恵まれていますが、環境汚染が大きな社会問題となっている時代だけに、村の役割を実感、「森・川・緑」を村づくりの基本にしています。都市に住む方々との交流の基盤になっているのが自然環境づくり運動「200カイリの森」と村営「鯛生スポーツセンター」を通じての青少年健全育成です。

「200カイリの森」は一昨年から始めた植林運動です。村役場の裏にある荒れた敷地(30㌶)を村が購入しました。広葉樹を植えるなど整備して、紅葉の季節には都市からも観光に来ていただこう、と考えています。

有明海のノリ栽培が不良で騒がれましたが、海や川の水環境は山の環境と無関係ではありません。植林作業には大川漁協(福岡県)、川副漁協(佐賀県)の協力がありました。筑後川から飲み水を取水している福岡市からも市職員たちが大勢で加勢してくれました。10年来、水辺の交流を続けている福岡のYMCAも植林や下刈り作業を手伝ってくれています。

このほど山林を新たに50㌶取得しましたが、うち一部の植林作業は福岡中央ライオンズクラブ会員たちが手伝ってくれます。森、緑づくりに各地から差し伸べられる善意が集まって、交流の花が開いています。

◇◇◇

自然の真っただ中にある「鯛生スポーツセンター」は、サッカーW杯でカメルーンチームがベースキャンプした施設で、おかげさまで中津江村は"日本一有名な村"となりました。

このセンターは青少年健全育成を目的に平成2年にできたのですが、グラウンド5面(うち芝3面)、雨天練習場、体育館、プール、宿泊施設(430人収容)があります。

サッカーW杯の代表チームが使った施設となれば、若者たちのロマンを沸き立たせ、村としても歴史的なブランドになって磐石の財産です。「何のサービスもできませんが……」を条件に誘致に名乗りを挙げました。「それでもOK!」。下見の時点で大満足したのがカメルーンでした。お国柄ですね(笑い)。

「シドニー・オリンピックで優勝したカメルーンチームが来るんだって? すごいねぇ!」

村外で暮らしている家族や親類などが一足先に騒いだり、ふるさと自慢したり。そうして、村民もサッカーというスポーツに徐々に興味を持ち始めました。ムードが盛り上がるにつれてボランティアも増え、歓迎アイデアも次々と生まれました。

◇◇◇

猫の目のように変わるチーム一行の到着スケジュール、思いも寄らぬ大幅遅れには大弱りでしたが、村職員みんな良い勉強になりました。連日、黒だかりのマスコミの方たちに追われて疲れました。

当初予定から9日遅れでようやく深夜、一行は福岡空港に着きました。実は時間が遅いのでホテルを準備してあったのですが、一行はそのままバスに乗り込んで村へ直行しました。「村挙げての熱意が伝わっている! 最高のお似合いチームだ」と感激したものです。

5月24日午前3時20分――。多くの村民が一睡もせずに笑顔でバスを出迎えました。マスコミのカメラフラッシュが一斉に夜空を照らしました。熱くて、素朴で、笑顔のもてなし、さまざまな交歓風景が連日のようにニュースで広く発信されました。今――。予期しない"カメルーン効果"が次々と生まれています。村の産物が2倍も売れています。チューリップ帽子も人気上々です。スポーツセンターでの研修や合宿の予約申し込みも相次いでいます。「森・川・緑」の活動が見事に国際交流につながり、同時に都市の若者たちに役立つ村として一層活気づいています。

-903-

No. 335 (1/3)

新長期ビジョン論議

地域懇談会―N福岡

国土交通省九州地方整備局が今春策定した「九州・新長期ビジョン――都市と自然、アジアが身近な21世紀のフロンティア九州」を紹介する地域懇談会IN福岡（九州地方整備局、読売新聞西部本社主催）が7日、福岡市のホテルで開かれた。ビジョンは向こう10～15年後の九州の将来像を踏まえ、地方整備局所管事業のあり方を示したもので、パネルディスカッションではビジョンの基本施策について6人のパネリストによる活発な意見交換が行われた。

ゴザイン

都市と自然交流図れ

矢田 俊文氏

――検討調査会長の立場から、この新長期ビジョンの説明と、そこに込めた思いを。

矢田　21世紀初頭の社会は少子高齢化が進み、人々は高いQOL（生活の質）を求める一方で国際間競争が進展、地球環境問題は深刻化する。そうした中で10～15年先の九州の社会資本整備はどうあるべきか、その方向性を示したのが新長期ビジョンだ。

他地域に比べ九州は50～60万都市圏が均等に分布し、豊かな自然も多く、アジアにも近い。これらの地域特性・九州らしさを生かすため、基本コンセプトを「都市と自然、アジアが身近な21世紀のフロンティア九州」とした。地域ごとに、人びとの暮らしを守る国土と環境の保全・再生、自然と都市サービスを享受できる都市・自然交流圏づくり、地域の活力を支えるネットワーク型交流基盤づくりの公共投資のあり方を改め、21世紀はお金がなくても暮らせる山間地域を意識したインフラ整備が必要だ。

九州・新長期ビジョンの基本施策

◎暮らしを守る国土と環境の保全・再生
◎自然と都市サービスを享受できる都市・自然交流圏づくり
◎地域の活力を支えるネットワーク型交流基盤づくり

吉田 信夫氏

吉田　他の地方整備局の新長期ビジョンに比べ「アジア」を盛り込んだことで九州らしい地域の個性、イメージを訴える力があり、評価できる。

九州域内の交通についてみると、東海岸の整備機能を、目的に応じて低い利用コストで徹底活用しながら、ソフトとの組み合わせによってその機能をさらに高めていくという発想の転換が大切ではないか。新長期ビジョンにはこの機能主義の考え方が盛り込まれており、共感できる内容だ。

大谷　福岡市はかつて大渇水を経験し全国一の「節水都市」と言われる

実を

パネリスト

▽九州大学大学院経済学研究院長 九州・新長期ビジョン検討調査会会長　矢田俊文氏
▽西日本鉄道株式会社専務取締役　長尾亜夫氏
▽福岡大学工学部教授　吉田信夫氏
▽NPO法人筑後川流域連携倶楽部理事長 久留米大学経済学部教授　駄田井正氏
▽株式会社オリジナル・メディア・サービス代表取締役　大谷鮎子氏
▽株式会社福岡ドーム副社長 プロ野球球団福岡ダイエーホークス社長　髙塚猛氏

◆コーディネーター　▽読売新聞西部本社経済部長・沢田孝雄

讀賣新聞　2002年(平成14年) 8月23日(金曜日)

海・川・山を観光活用

駄田井 正氏

――アジアからの留学生受け入れについて伺いたい。

矢田　アジアからの留学生はレベルの高い所を志向して増加しているが、アジアの国々が求めているのは中堅の技術者。日本がどう応えるか。施設や指導者の面でゆとりのある工業高専などで中堅技術者を養成することも大きな戦略だ。九州からもかなりの企業がアジア戦略を展開しているが、個々の戦略をもう少し全体的に統合して、目に見えるような九州のアジア戦略のマーケティングが必要だ。教育の面ではできるだけ実行していきたいと考えている。

――交易もより盛んになる。ハード面でやるべきことは。

吉田　九州・山口の対環黄海、東アジア交流は今後さらに深まることになる。AU（アジア連合）をつくって通貨統合など国と国の障壁を取り除くソフトな議論を始めてもいいのではないか。外国に比べ日本は物流コストが高く、コンテナヤードの機能強化や情報通信網を駆使した物流コストの軽減が必要。陸・海・空交通の整備が必要だが、次の長期ビジョン策定時には、九州と韓国をトンネルで結び、列車を走らせるといった構想も論議されるかもしれない。

――新長期ビジョンの都市とは別に、個別のまちづくりについて提案があれば。

高塚　21世紀は個人がいかに「幸せで楽しいか」ということを尺度にしなければいけない。経済大国ニッポンから生活大国ニッポンに生まれ変わるということだ。個人の多様な価値観を認め、多くの人に集まってもらうことがまちづくりの基本。東京、大阪に比べ福岡は生活の豊かさを享受できる都市だが、今まで情報発信力を持てなかった都市だったのではないか。情報発信コストが安くなり、地域で起きた現象の情報はまたたく間に全国に伝わる。情報インフラの整備が急務だ。

――高速道が整備され高速バスが多くなってきたが、道路を使う側からの注文があれば。

長尾　人・モノ・情報が空間を移動するモビリティーが今後のキーワードだろう。移動の拡大、発展は人の生活、文明・文化を向上させていく。クロスハ

高塚　猛氏